

浅草の地域文化と三社祭

「江戸の子供」を意味する江戸っ子という古い日本語は、江戸、つまり現在の東京で生まれ育った人を指す言葉でした。しかしながら、現代の意味は、真の東京人の心意気と魂を持つ人を指しますが、どのような人なら江戸っ子と呼べるのかについて明確な定義を突き止めるのは簡単ではありません。同様に、生まれた時から浅草に住んでいる人々は、自らを浅草っ子と呼びます。もちろん、浅草は江戸の一部となり、また東京の一部ですが、浅草の人々は常に地元の誇りに対する強い思いを持ってきました。

浅草は今では東京の最も人気のある観光地となっていますが、ここは何といても住宅地です。この地域を形成する44の小さな地区は地域の連帯感と友情によって結び付けられており、それこそ住民にとっては自分たちが浅草っ子であるという意識の要となっています。地元の人々は、浅草の伝統に敬服し、また未来に対しては現代的な見解を持っています。浅草っ子は浅草に対する明確な誇りを持っており、騒がしい祭を楽しむ一方で、その故郷に対する愛や責任感を決して忘れません。

この地区の物理的・精神的な中心は、浅草寺の境内とその近くの浅草神社です。浅草寺を創建した3人を参拝し、神格化するために創建されました。3人とは、隅田川で漁をしているときに網の中に仏教の女神、観音の金の像を見つけた2人の兄弟、そしてその神聖な像を安置するために自身の住宅を改装して浅草寺を創建した村の賢人のことです。浅草寺は仏教寺院ですが、境内への入り口にある石の鳥居から分かる通り、浅草神社は神道です。重要文化財に指定されている浅草神社の境内の本殿は、第二次世界大戦の焼夷弾からの攻撃を逃れたこの地域では数少ない建物のひとつです。

神社では、地区で最大の祭のひとつ、そして実際のところ街でも最大の祭のひとつである三社祭を開催しています。この祭は、毎年5月18日に最も近い週末に開催され、700年以上にわたって何らかの形で開催されていたと考えられています。催しは金曜日、浅草寺の仲見世やその他の通りを、手の混んだ衣装や、伝統的な衣装を身に着けた地元の人々が伝統的な音楽と踊りとともに練り歩く大行列から始まります。夜になると、地元の住民は提灯で飾られた6基の神輿を肩に担ぎ、通りを練り歩きます。この催しは夜宮と言われています。土曜日には、浅草の44カ町から集まった100基の神輿を担いだ祭の参加者が浅草寺の本殿の裏に集まります。それぞれの地域からの参加者は、神輿チームはそれぞれの神輿を神様から清めてもらうように浅草神社まで担ぎ、その後それぞれの地域に戻って祝います。この祭のメインの催しは、それぞれが浅草寺の創始者を表す装飾をほどこした3基の神輿を担ぎ、浅草の全地区を練り歩く日曜日のパレードです。この週末を通じて、三社祭には何百万人という観光客や地元民が訪れます。

浅草っ子は、祭の衣装を身に着け、神輿をかついで各自の町内を練り歩くので、一目でわかります。三社祭に込められた意味、伝統的な衣装の着方や神輿の担ぎ方を子どもたちに教え、また、祭の屋台に家族と立って、催しが終わった後にはその後片付けをするのが浅草っ子です。浅草っ子は彼らの地域の歴史や文化を伝えることで、将来の世代の浅草っ子にその伝統が受け継がれるよう努めています。